

さくらさく小径

浅間中学校1年

私の祖母は昔から足腰が弱いために、歩く力を保とうとずっと散歩をしている。幼い頃から、祖母と一緒に、毎年春、暖かい時期になる頃から散歩をしていた。ときには家の周辺を散策しながら歩いたり、あるときにはちゃんとウォーキングするために整備されたところに出かけて何周も何周も祖母とゆっくり歩いたりもした。歩くときは祖母が転んだり倒れたりしないようにするために手を繋いでいた。その時の祖母の手はとても温かかった。心までも、温かく包まれているようで、その時だけは嫌なことがあったときも不安で胸がいっぱいなときも、スッキリと忘れることができた。

ある日、祖母とまた散歩に行こうと話していた。いつもと同じ場所に行くのもなんだかつまらなかったの、どこへ行こうか考えていたら祖母が「『さくらさく小径』に行ってみない?」と言った。聞いたことはあったけれど、はっきりとはその場所はわからなかった。とりあえず行ってみることにした。

長い下り坂の向こうに、立ち並ぶ桜を見たとき、私は呆然とした。「さくらさく小径」にはとてもたくさんの桜がずらりと並んでいた。車から降りて、桜を見上げた。とっても綺麗だった。しかも、その日は雲一つない晴天だった。きれいな青色の空と、とても可愛らしいピンク色の桜の木が相性抜群だった。祖母と私が歩き始めたとき、ちょうど1枚の桜の花びらが、ひらひらと落ちてきた。私はとっさにその花びらをつかんだ。つかんだその花びらはとても可憐だった。(持ち帰って押し花にでもしよう)と思ったとき、急に風がふいた。その瞬間、花びらはひらりと浮き上がり、風に乗って行ってしまった。空の高みへと吸い込まれるように消えていった。悲しいはずなのにちっとも悲しくはなかった。

そして、また歩き始めた。いつも通り祖母と手を繋いだ。私は祖母と他愛のない会話をしながら、「さくらさく小径」を歩いた。歩いているとき、自動車の騒がしい音は聞こえてこなかった。かわりに近くを流れる川の音が聞こえた。私は今までにないくらい落ち着いた。とても心地よかった。ずっとここにいたい。思っていたより、「さくらさく小径」は長かった。急な坂もあれば川の近くを通る道、ただの道でも周りにきれいな桜があったり、桜の匂いがする場所もあったりした。そこらにある小さなお花ですらとても可愛らしく思えた。私は祖母と2時間半くらい「さくらさく小径」を歩いた。

後日、祖母と散歩をしに行った。その日の目的地は、「さくらさく小径」ではなかった。一緒に歩くことは楽しかった。けれども「さくらさく小径」に行ったときほど楽しいとは思えなかった。その後も、たくさんお散歩をしたが、やはり「さくらさく小径」ほどは楽しくなかった。新しい散歩の楽しみを求めていると自分でもわかった。

今度は、私から祖母に「『さくらさく小径』へ行こう。」と、誘った。春もそろそろ終わりの時期だった。咲き初めだった桜も、吹雪のように舞っていた。上を見れば空の青色と桜のピンクが混じって、とても鮮やかなレースのようだった。下を見れば桜の花びらがたくさん落ちていて、まるでピンク色のカーペットがぎゅーっと敷き詰められているようだった。隅っこを見るとシバザクラが植えてある。シバザクラのピンク色や紫色などが、桜のカーペットを縁取っていた。ずーっと続いている道が全てピンクに染まっていた。風が吹けば桜の花びらが一斉に飛んで視界が桜で遮られるくらいだった。以前の「さくらさく小径」より桜の香りは強かった。とても居心地が良かった。祖母と手を繋いだ。いつもより暖かかった。手を繋いでいるだけなのに体全体が暖かい膜に包まれているようだった。私は祖母に向かって「春って桜も綺麗だし暖かいしとってもいいね！」と言った。祖母は私に向かって「そうだね」と優しく答えてくれた。その言葉は今でも忘れていない。とても暖かくて、優しい、とても落ち着く声だった。「さくらさく小径」を一緒に祖母と歩いたこと、とても暖かい手で強く手を握りしめてくれたこと。思い出すたびに、私を力づけてくれるだろう。

今年は、まだ祖母とお散歩をしていない。また「さくらさく小径」に桜が咲いたら祖母と一緒に散歩に行きたい。そんな年が、長く続いたらと願っている。